

たち かわ ゆう じ ろう

立川勇次郎

電気・電鉄事業に情熱を燃やした男
—大垣の工業都市化を推進—立川勇次郎 (1862 ~ 1925)
出典：『イビデン70年史』

■生い立ちから関東での活躍

立川勇次郎は、1862(文久2)年、美濃国大垣藩(現岐阜県大垣市)の藩士・清水垣右衛門の次男として生まれた。1881(明治14)年、19歳のときに立川清助の養子となった。弁護士の資格を取り名古屋において開業していたが、1886年に産業・社会の近代化が進むなか実業家の道を決意し、上京して電鉄及び電力の企業化を目標とした。

立川は、関東で最初の電気鉄道である1904(明治37)年に大師電気鉄道(後の京浜急行電鉄)を開業し、専務取締役として経営の任にあたった。また、電鉄事業のほかにも1898年に東京白熱電灯製造(後の東京芝浦電気)の取締役として経営に参加し、電球・電気機器の製造普及にも努めた。

■揖斐川電力株式会社と養老鉄道株式会社の創立

明治末期ころに、岐阜県大垣では各産業にエネルギーを供給する電力会社を設立し、それを基に大企業の紡績工場などを誘致しようという計画があった。そこで、起業の具体化を促進するために、当時業界で名高い有力者であっ

た大垣出身である立川を経営者として迎え入れ、1912(大正元)年に揖斐川電力株式会社(現在のイビデン株式会社)を設立した。

揖斐川電力の最初の発電所は、1915(大正4)年に完成した岐阜・福井県境の夜叉ヶ池を水源とする揖斐川支流の広瀬川の水を利用した揖斐郡久瀬村大字西横山にある西横山発電所である。この発電所が完成したことによって、4000kwの電力供給が可能となり、大垣には摂津紡績大垣工場、田中カーバイト工場が設置され、揖斐川電力株式会社の電力は余裕がないほどに使用された。

また、立川は大垣の有志が地元振興策として1911



揖斐川電力が建設した西横山発電所 (1915) 出典：『イビデン70年史』

(明治44)年に養老鉄道株式会社の創立に参画、取締役社長に就任した。養老鉄道は、1913(大正2)年に大垣～池野、大垣～養老が完成して営業を始め、1919年には池野～揖斐、養老～桑名が開通し、総延長56kmの鉄道となった。また、養老鉄道は、「轻便鉄道法」によって敷設され、当初は蒸気機関車で運行されたが、1923年に全線電化を行い、電車が運行されるようになり、立川の電鉄事業にける意欲をうかがえることができる。

1925(大正14)年に立川はこの世を去ったが、電気・電鉄事業の先

駆者であり、大垣においては揖斐川電力株式会社や養老鉄道を設立し、この地方の工業化に多大な貢献を尽くした。



1927(昭和2)年建立の「立川勇次郎君之碑」(左)とその脇の養老駅(右)



写真：清水 武撮影

(入江隆亮)